
神様はいない

有栖川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様はいない

【Nコード】

N0723X

【作者名】

有栖川

【あらすじ】

西暦2079年。

人類は科学を更に発展させ、火星を第二の地球にするほど成長していた。人間の黒い感情が、世界を振り回し始める。

時を溯らんとする”神”にでもなったかのような人間の欲望はついに戦火を巻き起こす。

混乱する世界の中で、人々は何を思い、どのように行動するのか。

1（前書き）

どうも、いかりんです。

はじめまして、という挨拶が妥当でしょう。今回はかなり苦戦している小説です。

本来、自分はミステリ畑の人間なので、こういうSFものは読むのはいいけど書くのはちよつと……っていう奴です。

まあそんなド素人が書いた小説を少しでも楽しんでくださったら幸いです。

時は西暦2079年。

或る宇宙船の一室にて、その物語は始まる。

「時間逆行計画中間報告書ねえ」

黒いスーツのようなものを着ている女性が、二十頁程はある資料を手元で揺らしながら、窓ガラスから青い惑星を見つめる。

「問題が有ったでしょうかね？」

笑いながら尋ねる青年。だが、その笑みには少ばかり不安の色が見えた。

「時間の流れは常に一定よ。それに逆らえば神の怒りが下るわ」

「驚きましたね、あなたが”神”などという言葉を使うとは」

「ただの喩えよ。私は、この計画には何か問題が有る様にしか思えないの」

青年は苦笑を溢す。

「その話は我らが母なる惑星、地球に戻ってから致しましょう」

「火星の視察に集中しろ、ということね」

「そういうことです、我が国の大統領閣下からの懇願ですからね」

「今の時代、国なんてあつてないようなものよ」

青年は恭しく頭を垂れると、部屋から出て行った。

女性の名前はアイリーン・レドルフ。現在世界を二分割している派閥の内、その主流派である派閥に属し、その中でもそれほどの地位を得ている女性だ。現在の職業は代議士である。

が、それほどの地位を得ているといっても、所詮は捨て駒にしか過ぎず、大統領にとってはいつ死んでも替えが利く地位についている人物だ。死んでも死ななくてもどうでもいい人物なのだ。

先ほどの青年はその秘書であるシェリング・フォードレス。有能な秘書であることは、間違いない。

保有している知識も常人の倍近くはある。が、一般常識に欠けると

ころがあり、アイリーン曰く、間拔けた変人、だそうだ。

彼女達が目指しているのは火星。なぜ火星に視察に行くのかというと、火星には地球外原始的生命体。所謂宇宙人なるものが生息していることが明らかになったからだ。

それ以来、多くの研究者が調査し、2051年には火星への上陸を果たした。

先ほど、世界を二分割している派閥と記述した。

火星に生息する宇宙人の発見により、火星を侵略し宇宙開発の拠点にすることで、更なる宇宙人の探査に熱を上げるべき、という論者が集まる派閥。もう一つは、火星に生息する宇宙人を保護し、科学技術に関する知識を与え、友好的に接することで、宇宙人の観察をするべき。という論者が集まる派閥。

現在は後者が主流派であるために、火星人の調査研究、保護が進められている。

だが、前者の派閥も主流派に成り上がるため、工作や戦争を仕掛けてくることもあり、

第三次世界大戦も起こったほどである。

作中では便宜的に前者の派閥を「侵略過激派」と、後者の派閥を「保護穏健派」と呼称する。

処で、保護保守派の中でもそれなりの地位にあるアイリーンに、もしものことがないようにという配慮により、護衛艦『イージス』が護衛している。

彼らの話題に出た『時間逆行計画』とは…。

それは追々説明するでしょう。

「火星が見えてきたわね」

アイリーンはそう呟くと、手に持っていた資料を鞆の中にいれ、コックピットに戻る。

今現在火星は大気を人工的に開発することで、宇宙服無しでも出れるようになっていいる。因みに月もそのようになっていいる。

「おや、呼びに行こうと思ったのですが、お早いですね」

シェリングはいつも浮かべている微笑をアイリーンに向けると、その顔のままコックピット前面にある巨大モニターの方へ向きなおす。「当然よ、アイリーン・レドルフ、天地神明に誓って一度も時間に遅れたことは無いわ」

「それは結構」

「気になるのは、少し早い上陸ということだけね」

「偶然ですね、自分も疑問に思っていたのです」

「護衛艦をちらかせても怯む様な連中じゃないはずよ。火星で殺すつもりかしら」

「護衛を増やしますか？」

「そつしてちょうだい」

艦長が着陸指示を出す。同時に、後方で追尾していたイージスも着陸態勢に入る。

白い建物―恐らくは研究所であろうが―が見えてきた。

そこに着陸すると、同じようにイージスも着地する。

イージスから十名ほどの鍛え抜かれた護衛官が出てくる。ほぼ同時に、こちらの船のハッチが開き、アイリーンとシェリングが立ち上がる。

コックピットから五名ほどの護衛とともに火星に出てくると、イージスの乗務員と邂逅を果たす。

周囲の山々は赤く輝く。

海、及び人工的に製作された大気によって青い空は地球そのものだ。ただ地球と違うところをあげれば、少々不便だということだろう。「いいところね、火星」

「そう言ってもらえるなら来た価値があるというものでしょう、十年ほど前に一般公開されてからは、地球人も増えてきていますからね」

「他人の惑星を観光地にするなんて、考えることは侵略過激派と同じじゃないの？」

「保護穏健派のトップに直判談されてはいかがでしょうか」

「聞く耳を持つと思う？」

「可能性は低いかと」

「まあいいわ、無駄話はもう少し経ったらにしましょう」

「了解です」

アイリールらが研究所へ足を踏み入れる、そこでは五匹ほどの火星人と共に、多くの研究員らが右往左往していた。

「案外数は少ないのね」

「保護、友好的。という言葉による弊害で、あまり大規模な研究はできませんよ、血液を採取するのにも一苦労です」

「案外たこみたいな形だと思ったけど、猿ほどの背丈なのね、まあそこまで毛深くないけど」

「漫画や小説に毒されすぎです。航空宇宙局が発表したように、知能は人間に近いのですからね」

「イチジクの葉で陰部でも隠すの？」

「見ての通り、人間ほど強調されてはいません。火星人も案外気にしていないようですしね」

「あ、そう」

暫く沈黙が二人の間で続く。それを破ったのはアイリールだった。

「科学技術を理解できるほどの頭なら、侵略したら抵抗するだけじゃない」

「我々の言語を理解できるかどうかは分かりませんがね、今はその言語を教える中で、火星인들이使っている言語を研究中です、同時にDNAなども」

「その過程で服を着るのかしら」

「さあ？ご想像にお任せします」

「まあいいわ、暫くここを眺めてるから」

「了解です」

暫くアイリールは大型のコンピュータを眺めたり、火星人を眺めたりしていた。

二時間ほど経っただろうか、アイリーンは昼食にしようと提案、多くの人物がそれに同意した。

近くのカフェに入ると、護衛と少々距離をとり、シェリングと二人きりなる形で昼食を取る。

「今後の予定はどうします？」

「もう帰るわ。それよりもあの計画の事が気になるしね」

「なるほど。ではそのように手配します。まあ、昼食ぐらいはここで取っておきましょう」

「そうね、とりあえず、サンドイッチのベジタブルセット一つお願い」

「了解です」

シェリングが店員を呼び寄せると、先ほどのサンドイッチセット、そしてサンドイッチの詰め合わせセットを頼んだ。

「あら、貴方もサンドイッチなら同じのを頼めばよかったじゃない」

「サンドイッチの中にハムが無いなんて考えられません」

「変わっているのね」

暫くすると、コーヒー二つ、そしてサンドイッチセットが運ばれてきた。

「まあ、意外と美味しいじゃない」

「同意ですが、野菜だけのサンドイッチがそう美味だとは思えないのですが」

「失礼ね、卵も入っているわ」

「いずれにせよ同じことです、極度な菜食主義は体に不調をきたしますよ？たまには肉料理を召しあがって見たらいかがでしょうか」

「余計なお世話というものよ、私は現状これに満足しているの」

「そうですか、それは結構」

十分ほど経つと、シェリングが立ち上がり、それにつられてアイリーンも立ち上がった。

「30ドルか」

料金を払うと、喫茶店から出てくる二人。

それにつられ、十五名ほどの護衛も外に出る。

真っ直ぐ船へ戻る二人。徒歩三分ほどなので、すぐ到着する。

「正直、結構目立つ大きさよね、この護衛艦」

「なかなか頼りがいのある船です。最新鋭の兵器には負けませんがね」
「最新鋭の兵器をなぜ借りてこなかったのかしら」

「恐縮ながら、大統領閣下はあなたがこの世から消えても大した損害にはならないと思ったのではないのでしょうかね」

「舐められたものね、どっちからも」

「眼の上のたんこぶですが、早急に取り外す必要ありません、しばらくは傀儡となって生活しましょう」

「気に食わないわ」

自身の船に乗り込むと、ハッチが閉じる、そのまま真っ直ぐにコックピットに進み、二人は自身の席に座る。

「気になることが一つ、別に今話さなくてもいい事が一つ」

「どちらも話してみなさい」

「一つ目ですが、火星滞在中に過激派の攻撃がなかったのが氣になります。地球に向かう際に爆撃を受ける可能性も十分に考えられるので最大限のご注意を」

「もう一つは？」

「世界政府樹立が正式に発表されました。本部はU S Aにおかれ、それぞれ支部は日本、イギリス、フランス、ロシア、中国、そしてドイツにおかれるようです。」

「やけにヨーロッパが多いわね」

「百年前の戦争を引きずっているのですしょう」

「それにしてもなぜ日本に？」

「仮にも世界第二位の経済大国です、おかないわけには行かないでしょう。」

U S Aの傀儡状態から抜け出し、真の自立が実現できたと思った瞬間にコレですからね」

「U S Aはそんなに自分の権力を晒したいのかしら」

「ご想像にお任せします」

気づけば、すでに船は火星から抜け出し、宇宙空間にいた。

「もう部屋に戻って大丈夫ですよ、長々と申し訳ございませんでした」

「別に」

アイリーンが立ち上がると、

「あなたとの長話には慣れているわ」

とシェリングを見下すように言うと、自室へ戻っていった。

その姿を見届けると、シェリングは大型モニターを見つめ、艦長と何かを話しはじめた。

「不穏な計画、暗躍する首脳レベルの人物。第四次世界大戦。不安なことが多すぎるわ」

アイリーンは椅子に座ると、直ぐに眠った。あまりに疲れていたのかもしれない。

凡そ二時間ほど経っただろうか、アイリーンはふと急に起き上がり、時計を見る、もう直ぐで地球着陸の時間である。荷物は幸い出していなかったため、かばんを持ってすぐにコックピットに向かった。

「時間通りです、流石ですね」

「私が慌てて出てきたことを推測して皮肉を言ったの？」

「ご想像にお任せします」

「あなたその言葉好きね、相手に考えることを押し付けすぎている気もするわ」

「不屈の名探偵も灰色の脳細胞云々と言っていました、想像力を働かせるのは別に悪いことではないかと」

「残念だけどミステリ談義はよしてちょうだい。もうすぐ地球よ」

「承知しております」

艦長が着陸態勢をとらせようと声を張り上げる。同時に、追尾していたイージスも着陸態勢に入る。

宇宙船用の着陸施設が見えてきた。

そこに静かに着陸二つの宇宙船。見上げる施設の職員たち。

やがてハッチが開く。

「お疲れ様でした。とりあえず、下で待っている国務長官閣下のご挨拶に応じましょう」

「面倒ね、いつも無駄話は後で言っているのだけれど」

「まあそう言わずに、社交辞令という奴です」

渋い表情でアイリーンが立ち上がる、それに引っ張られるようにして、すばやくシェリングも立ち上がる。

「ところでお気をつけ下さい。船から出た瞬間ズキーンというのはよくあるそうです」

「でも下には国務長官がいるんでしょう？ 私みたいな小物よりもそっちを狙うと思うわ」

「一理あります。まあ取り敢えず注意しておくのに越したことはないでしょう」

護衛が五人ほど付いていきながら、ハッチをおりていくアイリーン、そしてシェリング。

直ぐしたにはアダムス・ギーセル国務長官が待っていた。

「お帰り。視察はどうだったかね？」

「なかなか興味深かったです。ただ火星人に言語を教えるとなると至難でしょうね」

「まあ根気よくやっていくよ」

「それよりも、世界政府の件は？」

「その話は後にしよう、ここらへんは報道陣がちらついているのでね」

「苦勞が絶えませんね」

「政治に障害はつきものだよ。そういう商売だ。何かやろうとしたら悪く言う奴が必ず出てくる。少し賢くなると、自分の考えをあたかも真実であるかのように大衆に刷り込ませる。それを日常的に行っているのがマスコミだ」

そのような話をしながら、専用飛行機に乗り込むアダムス、シェリング、アイリーン、他護衛数名。

飛行機の中は無言だった。空飛ぶ車などが流通してから渋滞こそ減ったものの、こういう飛行機は珍しがられた、特にこういう飛行機が車が普通に飛んでいる場所を高速で飛んでいるのは少々可笑しいかもしれない。

不意に、シェリングが口を開く。

「時間遡行計画もそうですけど、次元突破転送システムはどうしたんですか？」

「ああ、あれかね、試作品は出来たがね。距離6000kmを光速より、0.0001秒だけ早く着くだけだったが」

「十分です、後で計算して光速よりどれだけ速いのか出してみることにしますよ」

「相変わらず好奇心旺盛なことだね」

「いえ、お褒めには及びません」

いつも微笑を浮かべながらアダムスと他愛もない会話をするシェリング。

いつの間にか、専用飛行機はビルの屋上に着陸していた。

「滑走路は必要ないんですか？」

「基本はヘリにジェットエンジンを搭載したようなものだ、着陸態勢になるとプロペラが回りだす。」

「なるほど」

飛行機から出てくるアダムス、アイリーン、シェリング。

彼等はビルの中へと消えていった。

2（前書き）

ご無沙汰しています。いかりんです。

今回は第二話目。アイリーンたちとほぼ同じ時間帯であることを先に言っておきます。

では早速第二話目、少しでも楽しんでくださったら幸いです。

西暦2079年

とある研究所の研究室にて――

「次元突破システム故障！ 試作機大破！」

声を張り上げる一人の若手研究員。

「そんな！ 万全を期した筈だ！ そんなわけが！」

初老かと思われるもう一人の研究員。

「こつ、これは銃弾！？」

三人目の研究員が声を再び張り上げる。視線の先には機械の中に埋め込まれた一つの弾丸。

「そつ、そんなっ！？ ここに何者かが侵入したというのか！」

再び声を張り上げる若手研究員。

「お前らには死んでもらわないとな……」

乾いた銃声が三発響く。三つの銃弾は三人の研究員の心臓を射抜いていた。

「この機械は俺等侵略過激派にとっては都合の悪い代物なんadena、悪いが、データだけ貰うぜ」

パソコンを暫く操作すると、一人の男は机にあった資料を懐に入れると、小さな黒く、紅く点滅する何かを机の上に載せて、研究所から出て行った。

西暦2079年

場所はある民家。国は英国。午前七時、リビングにて――

一人の男が新聞を片手で手に取り、もう一つの手でコーヒーカーブを持っていた。

「レナーズ国際研究所で大爆発！ しかも研究所が跡形も無くなるほどの爆発かあ……」

男の名はジェイムズ・マキシークラーク。近くの研究所で働いて

いる研究員だ。極秘の時間遡行計画にも参加している、将来有望の若手研究員でもある。

「レナーズ……。あそこは確か次元突破システムを開発してた研究所の中でももっとも規模の大きい研究所。まーた侵略過激派の工作か……」

新聞をテーブルに置くと、コーヒーを啜る。その後、朝食を取る。「さて、行くか」

自宅を出ると、直ぐ近くの研究所に向かって歩き始める。

（同僚のクロウスに聞いてみるか……）

レナーズ国際研究所。正式名をレナーズ・ウィルソン記念国際研究所という。中々有名な研究所で、研究所がおかれているフランは世界的に有名な学者、レナーズ・ウィルソンの出身地ということで設立されたのがレナーズ国際研究所だ。ここでは次元突破システムや、最先端の研究を行っていた。

因みにこれからジェイムズが行く研究所は、レグシーズ研究所。時間遡行計画を研究している二つの研究所の一つで、非常に才能豊かな若者しか入れないのが特徴だ。

一時間後――

ジェイムズはパソコンのモニターとにらめっこしていた。

「このプログラムを書き換えないと……」

熱かった筈のコーヒーは、すっかり冷め切っていた。研究に熱中するあまり周囲が見えなくなるのがジェイムズの癖だ。

瞬間、朝のことを思い出す。

「そうだ、クロウスに聞いてみよう、朝のことを」

同僚、クロウス・フリージウスのデスクはすぐ近くにある、コーヒークップを手に持ちながら、十メートル程の道を歩く。

クロウスの姿が見えてきた。クロウスも自分と同じようにパソコンのモニターとにらめっこをしているようだ。

脅かそうと思い、クロウスの背後から声をかける。

「よっ、クロウス、なーに難しい顔をしているんだ？」

同僚は大して表情を変えず、めがねの奥の瞳を光らせながら、ゆつくりと後ろを振り向く。

「なんだ、ジェイムズか。今ちよつと取り込み中なんだが」

言葉を吐き出すように告げると、コーヒーを啜る。

「なんだ、はないじゃないか？ 愛想のない同僚を心配して来てやつたのに」

クロウスの反応につまらないと感じ、すこしぶつきらばうに言う。

「俺にとつてはなんだ、だ。さっき言ったように取り込み中だから、お前との会話は煩わしいんだよ。」

「それより、何について悩んでいるんだ？」

同僚の批判じみた発言を無視すると、コーヒーを啜った後に、言葉を発する。

「これだ」

クロウスが床を蹴ると、いすがモニターの前から移動する。モニターにはプログラムがびっしり書き込まれていた。

「どうにも可笑しくてな、うまく動かないんだよ。ほかの同僚に聞いてみても、わからないという答えが大半でな、悩んでいるんだよ」

クロウスの言葉を耳にしながら、腕を組み、モニターを見つめているジェイムズ。しばらくすると天啓を得たのか、硬直する。危うくコーヒーカップを落としそうになり、クロウスに注意され、漸く正気に戻る。

次のうちに、コーヒーカップをデスクに置き、キーボードを打ち込んで行く。

クロウスはそれを呆然と眺めているだけだった。

すぐに修正は完了し、テストでもバグは見つからなかった。

クロウスは口をあけてジェイムズの顔を眺めていた。

「どこでそんな技術を習得したんだ？」

暫く時間がたつと、クロウスが口を開いた。

「言っていなかったか？ 俺は大学時代に数理工学を専攻していたんだ」

得意気な顔でクロウスを見ながら言葉を発するジエイムズ。

「聞いていないぜ。お前から成績は優秀だったとは聞いていたがなふーん。だから数理開発研究班なんかに入ったのか。」

驚きつつも、コーヒーを嚙り、冷静さを取り戻すクロウス。

コーヒーを嚙っている間に、ジエイムズが来た理由を思い出す、確かジエイムズは自分に何か用があったはずだ。

「で、俺に何か用があったんだろう？ なんだよ」

「そうそう、朝の新聞を読んだか？ レナード国際研究所が爆発して、消失したっていう事件」

今朝の新聞の内容を思い出しながら、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「でっかく書いてあったからな。覚えているさ。それで？」

「俺は侵略過激派がやったんじゃないかと思う。あそこは次元突破システムを研究していたしな」

二人とも同時にコーヒーを嚙る。そして再び口をあけたのはジエイムズだった。

「次元突破システムのデータが盗まれていたようだし、でも侵略過激派がここまで次元突破システムのデータをほしがっていたのは何でだ？」

「技術力の差だ。知つてのとおり侵略過激派は技術力の低下が問題となってきた。主流派である保護穏健派の技術力が高すぎるんだよ。だから次元突破システムのデータを奪うことによって自分を自分のものにしようとしたんだろう。保護穏健派の柱とも言えるシステムのデータを壊す意味もあったかも知れないな」

「でも圧倒的なまでの技術力の差があったらその技術を取り込めそうにもないんじゃないか？」

「今保守穏健派の技術力がどれほどにまで成長しているのかを知るための要素でもあったんだよ。次元突破システムは最先端の技術なんだから、それを目標とすることで、急速的な技術力の発展が本来

の願望だろうな。いい指針になるんだよ、次元突破システムのデータっていうのは」

クロウスはのどを潤すためにコーヒを啜る。その間も何かを考えるようにして腕を組むジェイムズ。

「何でそんなに火星人の奴隷化、そして火星の侵略にこだわるんだ？」

「火星人が発見されてから、他の星にも宇宙人がいる可能性が高くなってきている。奴等は何れまた新たな宇宙人が発見される可能性があるから、火星を宇宙開発の要にすべきだと訴えているんだよ。それに奴等は火星人を奴隷いしようとは思っていない、基本的な生態などを研究した後は殺戮するべきだ、という論者が大半だ。火星人が高い知能を持っている事は明らかだからな。反乱でもされたら困るってことだろう」

「でもなんで……。やつらも太陽系外で生命体がいそうな惑星は何光年以上も知っている……。あつ！そのための次元突破システムか！」

クロウスが満足そうに笑って頷く。再び二人ともコーヒを啜ると、再びクロウスが語りだす。

「次元突破システムが完成すれば、宇宙のどこでも行き来することができる。宇宙人を発見できる可能性が高まるはずだ。そして、ここで俺たちが研究している時間遡行計画の存在意義が発揮される。何故だか分かるか？」

「その星の過去に行けば、その星がどうやって誕生したか、宇宙人の生態、歴史、すべてを調べ上げることができるからか？」

「そうだ、さらに時間遡行計画は宇宙のなぞを解明するのにも使えるし、地球の歴史を調べる際にも役に立つんだよ。だからこうやって多くの研究者が精を出して日夜研究している」

「知ってるさ、俺もそのうちの一人だからな」

「そっいえばそうだったか。いつもくだらない話しか持ちかけてこないからすっかり忘れていたよ」

ギロリとクロウスがジェイムズをにらみつけると、それに臆することなくジェイムズは口をあける。

「今日は俺のおかげで助かったんじゃないのか？え？」

「今日だけだろ。ひとつの特別な事例だけを持ち上げて全体を評価するのはバカげているぜ」

すっかり分が悪くなったジェイムズは、時計を見る。すると、ジェイムズはまるで小芝居を演じている大根役者のようにこういった。「おっと、もうこんな時間か。自分の研究があるんでね。失敬！」ジェイムズが走り去っていくのを遠めで眺めると、再びクロウスは自分の研究に戻った。

「時の流れは常に一定であり、それに逆らうと神からの処刑を受ける。か……」

こんなクロウスの呟きはもうジェイムズの耳には入っていないだろう。彼はすっかり自分のデスクへ戻っていつてしまった。

西暦2079年。

国は英国、とある建築物にて。午後十一時。応接間――

初老の男と、若い男が向かい合って座っている。

「いやあ、助かったよ。これさえあれば、わが侵略過激派も技術力の発展が見込めるからね、次も頼んだよ。君はわれわれの忠実な口ポットでいればいいんだからね」

初老の男の名前はリアセル・クリファトス。侵略過激派の中でもかなり高い地位にいる男で、もともとはドイツで公務員をしていた男だ。

リアセルが笑いながらそう言う。

「はい、ではこれで」

と、不機嫌そうに若い男が返す。

若い男の名前はセバスチアーノ・モリノス。有能な殺し屋だが、その名はあまり知られてはいない。侵略過激派に買われた殺し屋だ。

暫くすると、男が立ち上がり、ゆつくりと歩き始める。

やがてセバスチアーノの姿は暗闇の中へ消えていく。表情を一切崩さず、冷徹なロボットのような顔をしながら、セバスチアーノは建築物から出て行った。

「はっ、あんなロボット。変な感情でも起こしたらすぐ処分してくれるわ、あんな奴。」

使い捨てみたいなもんだからな」

セバスチアーノが建築物から出て行ったことを確認すると、陰口を叩く。

「大体、あいつは依頼料が高いんだよ、若手の癖に。若い奴は少ない金で働くんだよ普通はな。まったく、そろそろ処分する頃合じゃないか？ええ？」

誰かと電話で会話しているらしい。暫く世間話などをすると、電話を切り、リアセルは自室に戻っていった。

西暦2079年。

場所はある民家。国は英国。午前七時、リビングにて――

「なっ！こ、これは一体！？」

ジェームズの視線の先には、新聞の一面を我が物顔で独占している記事にあった。

『侵略過激派の幹部と思われるリアセル・クリファトス氏が、自宅にて、何者かに暗殺されたことが当局の取材で明らかになった。犯人は不明であるとのこと』

「もしかして、研究所を爆破させた奴とクリファトスを殺した奴は同一人物なのか……だとしたらもしかしたら……」

「まさか……でもそれしか……」

夜中というのには少し早い時間。ネットの速報を眺めながらジェームズと同じ考えにいたった日本人が一人居た。

2（後書き）

次回の投稿は来週の日曜日が月曜になります。

3（前書き）

どうも、いかりんです。

予告よりも早めに投稿しました。よって、字数がいつもより少なめですがご容赦ください。

なぜこんなに早く投稿したかといわれれば、個人的な都合としか言いようがありません。

でもこんなに早く第三話を投稿して、しかも字数も足りない。さらに短編を製作しているのだから作者もれなく一週間神から天罰を与えられ続けるでしょう。

そんな苦行に耐えつつ執筆した第三話、楽しんでくれたら幸いです。

西暦2079年――

国は日本。場所は東京都の或るマンション。時刻は午後十時。

一人の男がニユースを見ながら絶句していた。理由は簡単である、自分が秘密裏にファイリングしていた侵略過激派に属する人物の中でも、最上級に注意が必要だった人物、リアセル・クリファトスが何者かに暗殺されたからだ。

ニユースの写真には、黒を基調とし、見たものに畏怖と羨望を与えるほどの大きさの洋館と、凶弾に倒れたクリファトスの生前の写真が写っていた。朗らかな笑みには幸福を、歳不相応の黒髪をなびかせ、そのふくよかな体型。どこか生活はきわめて裕福で、財産は有り余る程あったと感じることができる気品の有る服を着こなしている。どうやらどこかの結婚式に参加する前に撮った写真らしい。クリファトスは保護穏健派のメディアにも知られていて、質問攻めにあつたことを自著で記していたことを思い出した。

次のページへ進むと、マウスをクリックする。が、男はページを開いたことを後悔した。なぜならば、その写真は凄惨さを極めていたからだ。部屋にはおびただしいほどの血。首がなくなつた遺体壁に埋め込まれていた数々の弾丸。思わず男は吐き気を感じる。すぐにページを閉じ、ネット仲間と意見を交換する。

「これは複数の犯行じゃないか？」

「壁に埋め込まれた弾丸を見ると散弾銃で単独での犯行だとも考えられるぜ」

「いやいや、単独での犯行？ そんなまさか。散弾銃の有効射程距離はせいぜい持って150mほどだぜ？ 技術が進歩したとはいえ、散弾銃なんて」

「でも複数で犯行に及ぶなんて考えられない、見つかるリスクが高まるんじゃないのか？」

白い背景に黒い文字。彼らは頻繁に意見交換していたが、私は一言だけその掲示板に書き込むと、パソコンをシャットダウンし、ベッドに向かった。

白い背景に映し出された黒い文字の羅列。それは驚愕の事実を記していた。ネット仲間の彼らは画面の中で興奮の声を抑えることはできないだろう。

『その散弾銃の有効射程距離外から確実にクリファトスの頭を貫くことができる殺し屋を私は知っている』

「そう、奴しかいないんだ、でも、それだとおかしいことになる…」

男は考え巡らせている途中に眠りに落ちた。

翌日――

黄金色に輝く陽の光を浴びて男がベッドから起き上がる。午前七時三十五分。

男は、その広さからしてみれば簡素ともいえるリビングに向かつて歩くと、いすに座り、壁面に埋めこまれている、テレビを見る。連日連夜、クリファトスの報道しかやっていないのですこしうんざりするのも無理はないだろう。すでに見慣れた写真と映像が繰り返し流される。

パンを齧り、コーヒーをすする。手元にA4判ほどで1cmほどの厚みがある、タブレットを取り出し、起動する。直後にテレビと同じような映像とともに、記事が流れるようにして記されていく。目の動きを瞬時にとりつけてあるカメラで分析し、読む速度を推定、そして記事を読むスピードとほぼ同じ速さで文字を打つ出すシステムになっている。

最先端技術でもあり、現在このシステムを採用しているのは日本ぐらいである。と、いうのも、このシステムを実用化しているのが

日本だけだからだ。同時にまだ日本も紙の需要のほうが多い。

男がこのシステムを採用している理由といえば、毎朝新聞をポストから取り出すのが面倒だからだ。男は昔から効率というものを重視している。

午前八時、男は身支度を済ませ、部屋を出る。マンションはエレベーター、エスカレーターを取り入れており、屋上駐車場は存在しない旧式のタイプだ。確か大家は地区三十年と言っていた。空中自動車が出たのが二十五年ほどだから、空中駐車場が存在しないのも無理はない――

エスカレーターに乗る、この時間帯、エレベーターは頻繁に利用され、下るだけならエスカレーターのほうが早いと判断したことに
よる行動だ。

近くに自身の勤務先があるため、歩いていく。

この白く、巨大なビルが男の勤務先。このビルは「外務省」という。そう、男は外交官なのだ。

ビルの中に入ると、そのまま真っすぐ自分の勤務先……ではなく、外務省のトップ、事務次官に会うために、事務次官室へ行く。黒くて格式のある扉をノックすると、中から声が返ってくる。扉を開けて中に入ると、椅子に座つてめがねを拭いていた事務次官が、めがねを填めて、男を見る。

「何の用かな？」

「事務次官は先日、および今朝のニュースを御覧になりましたか？」

「ああ、大変なニュースだよ、で？ それと君に何の関係が？ いや、一外交官としては関係があるのかもしれないが」

「自分は侵略過激派の動向に興味があります。そこで真に恐縮ながら、事務次官。今回の事件をきっかけに、私を一ヶ月間、侵略過激派のことに集中させていただけませんか？」

「それは、君を海外派遣させるとのことかね、諜報関係で」

「そういうことになります」

「だが、諜報関係の仕事は内閣府に委託してあるのだがね」

「何とかできませんかね、事務次官」

事務次官は考え込んでいた。十分ほどたつと、

「わかった。アメリカへの派遣ということなら、内閣府も了解してくれるだろう、今日中に準備を済ませてしまいなさい、急だが、明日出発にしよう」

「なぜ明日に？」

「こういうのは初動が一番大事なんだ。取り敢えず今日は有休にするから、家に帰って荷物をまとめておきなさい」

「わかりました」

事務次官室から出ると、そのまま真っすぐ自分のマンションへ帰宅する。

明日とは随分急だ。何か急がなければならない仕事があったのか。ということを考えていた男は、荷物の整理になかなか手間を取る。

何とか荷物の整理が完成したものの、すでに時刻は十一時、男はベツドに潜り、一瞬で眠りに落ちた。

翌日――

午前七時三十分、いつもどおり、黄金色の朝日を浴びると、早速着替えを済ませ、空港へと向かうため、マンションを出る。電車で空港まで十分ほどだが、駅まで二十分歩かなければいけない。どうしようかと悩んでいたところ、目の前を、ちょうど良く空中飛行タクシー――その呼び名は一昔前のもので、現在では単にタクシーと呼ばれる――が通りかかる。原則、タクシーは、空車の場合は地面の近くを低空飛行する必要があり、目に留まりやすいのだ。

男は、なら空港まで一気に行ってしまうおうと考えた。

黒いタクシーに乗る。空港まで、と一言言くと、タクシーが突如、高度500m近くまで浮かび上がる。空中道路と呼ばれる道路はあるものの、自由自在に移動できるため、道路を利用しない運転手も多い。どうやら、この運転手は最短距離を進むタイプらしく、それは効率を重視する男にとっても有り難かった。

「お客さん、そのバツチ、もしかして外交官とかなんかですかい？」
「ええ、これから海外へ派遣に」

「いいねえ、今は外交官もお金をもらえるようになったし、タクシ
ー運転手なんて年収五百万円程度ですからね」

外交官も大して稼げるわけではない、正規の方法から国家公務員
になったほうが稼げるぐらいだ——男はこの言葉がのど元まで出掛
かったが、気持ちを抑えて、景色を眺める。

どうもタクシー運転手は旧時代の癖なのか、おしゃべりでいけな
い。寡黙な客相手に会話を求められても困惑するだけだ、と男は思
っていた。男は運転手の話を耳に流しながら、東京の景色を眺めて
いた。といっても、今では旧時代とは違い、600mクラスの高層
ビルも多く作られているので、正しくは見上げる、という表現なの
だが。

まもなくして白く、巨大なビルのようなものが見えてきた。空港
だ。男はタクシーから降りると、空港へまっすぐと向かう。飛行機
の時間まであと三十分ほどある。空港へ入ると、早々に飛行機の中
に入ってしまった。

十四時間後——

不味い機内食を食べ終わり、窓からの景色を眺めていた男。急に
白い建築物が多量に並んでいる光景を視た。あれが有名な研究所通
り、リサーチヒルズらしい。男は、どうして空港や研究所、主要省
庁はすべて白色で統一されているのか気になった。が、それを考え
る暇もなく、機内アナウンスが放送され、飛行機は着陸した。

空港から出ると、男はホテルに向かって歩き出す。日本の外交官
の安月給で一ヶ月も滞在できるホテルともなると、数が限られてく
る、空港から三十分ほど入ったところに、小さなホテルがあった。
ホテルの名前は「マスターズリサーチホテル」どうやらホテル内部
には図書館や実験施設などもあるようで、研究者御用達のホテルら
しい。おまけに安いということだ。確かに今の自分は調査をしに来
ているので、このホテルは便利かもしれない、という思考をめぐら

していると、ある事実気づく。すこし狭いと感じるホテルなのに、それに実験施設や図書館が入ったら、泊まれる人数は限られるし、部屋は狭いだろう、という事実だ。が、一ヶ月も調査期間をもらったのに贅沢はいえない。おとなしくホテルに入り、チェックインを済ませると、503号室に入った。狭いと予想していたホテルであったが、中は我が家を少し狭くしたような形だった。

荷物を置いて出かける支度をする、ホテルを出る。侵略過激派と思しき人物を見かけると、それを隠れてメモ帳に記載していた。中でも度胆を抜かれたのが、少し入った裏路地で、保護穏健派の代議士が侵略過激派の代議士と親しげに話していたことだ。その会話の中にスパイ、という言葉が出てきたあたり、スパイで敵対する派閥に入っているのだろう。と予想する。ホテルから一步出た時点で驚愕の事実が多すぎる。一回喫茶店に入ろうと思いついた男は、茶色で木造製と思われる古いカフェに入った。内装はしっかりとしており、一番奥の席に座ると、ホットコーヒーを注文する。

しばらくして、ホットコーヒーが出てくる。それを啜りながら、レポートをノートパソコンで次々に纏めていく。だが、キーボードを叩く音と、手の動きが不意にある人物の声で消えた。

「あの、貴方は日本の外交官ですか？」

外交官バッジを填めているとはいえ、一般市民は誰も気づかなかったというのに、目の前に立っている人物はそれに気づいた。同業者であるのか。

「そうですが、貴方は？」

目の前に立っている青年。年は25、6といったところだろうか、イギリス系の顔立ちで、どことなく気品をうかがい知ることが出来る。

「おや、相手よりも先ず、自分が名乗るとというのがジャ——日本の礼儀というものでは？」

そんな旧時代よりもさらに昔の礼儀を取り出すとは、どうも海外の人々は日本という国を誤解している。そんな思いを抱きながら名

乗る。

「有森黎人、アリモリレイトと申します」

一瞬、日本人に話すかのように名乗ってしまったが、即座に英語読みに直す。どうやら相手は英語が話しやすそうなので、英語にあわせるという。

「英語も堪能なのですね。日本の外交官というのは、どうも南アメリカの国々はスペイン語やポルトガル語を使いたがる」

有森は目を丸くした。いくら母国語に慣れているからといって、世界の国際共通語で話さないのは外交官失格ではないか、と思ったからだ。外交官をやって五年間、有森は南アメリカには行っていないことを思い出した。

「で、あなたの名前、職業は？」

衝撃の事実にも多少動揺しつつも、本来青年に投げかけるべき質問を青年にした。青年は笑顔でこう答えた。

「シェリング・フォードレスと申します。イギリスである代議士の秘書をやっているものです」

シェリングは有森に握手を求めるように、右手を差し出した。

3（後書き）

字数が本当に少なくて困ります。

とりあえず、次回は今週の日曜日が来週の月曜日に投稿するかと
思われます。お楽しみを。

4（前書き）

ご無沙汰しています、いかりんです。

先ず皆様に声量をマックスにして謝罪いたします。

本当に申し訳ございませんでした。

とりあえず水曜日までに第四話を投稿すると法螺を吹き、こんなにも投稿日時を遅延いたしました。

また、第四話と銘打っておきながら、文字数は極端に少なく、内容も薄っぺらいだけです。

ところで活動報告のほうにも書いた病気ですが、本人はただのかぜだと思っていたところ、医者から喘息と診断されました。

大きな執筆ペースの遅延にはならないものの、普段の多忙さに加え、病気（風邪も併発）ですから、投稿日時は遅れる可能性があることを前もって予告しておきます。

前書きが長くなりました。第四話、スタートです。

西暦2079年――

国はアメリカ。午後6時。場所はある喫茶店にて――
「なるほど」

シェリングは有森の目の前の椅子に座っていた。有森とシェリングはすっかり打ち解けて、非常に友好的になっていた。

「つまり、黎人は侵略過激派を追って、このアメリカへ？」

「そうだね、僕はイギリスに行きたかったんだけど、君にここで会えたしプラスマイナス0かな、意外とこっちも侵略過激派が多いことを知ったし」

コーヒーをすすりながら二人は会話を進める。

「まあここは世界一の大国だし、侵略過激派が多くても仕方ないんじゃないかな」

「そうだねえ」

再びコーヒーを啜る二人。シェリングがサンドイッチを飲み込んだのを見ると、有森が立ち上がる。

「折角だし、レストランにでも行こう、シェリング」

「そうだね。そのほうがいい」

カウンターの前まで二人が来ると、有森が財布を取り出す。しかし、

「いいよ、僕が払うから。後のレストランも僕が払うからね」

と、有森が財布の中身を取り出すのを制し、自身の財布を取り出し、料金を支払う。

「ありがとう。助かるよ。御礼をしなきゃね」

二人で喫茶店を出ると、空車のタクシーと歩道を歩く人の姿であふれる大通りに向かう。

「タクシーでも拾おう。おっと、タクシー代ぐらいは僕に払わせてくれよ？」

空車のタクシーが道路を埋め尽くしているこの状況に、タクシーを拾うことはそう難しくない。すぐに空車のタクシーをひろうと、目的地のレストランに向かってタクシーが一直線に空を飛び始める。陽は既に落ち、漆黒の空にはぼつぼつと光る星がタクシーの窓からは見える。車が空を飛ぶようになってからは、渋滞は減少した。が、空中道路を律儀に走っていると、まれに渋滞現象に遭遇することもある。

しばらくすると、目的地についたというカーナビの電子音が鳴り響いた。そのままゆっくりとタクシーが高度を下げていき、レストランの前で止まった。

「今度くらいは僕が支払うよ」

と有森が言うと、財布を取り出して料金を支払う。そのあと二人してタクシーを同時に出ると、まっすぐにレストランへ向かう。

「ん？　なんであいつがアメリカに？」

「どうしたの？」

「いや、レストランで話すよ」

有森は視界に入ったある人物の顔をずっと眺めると、再びレストランに向かって歩き始めた。

——確かあいつはイギリスにいるはず——

現と思考のハザマを行き交いしながら、レストランの席に座る有森。シェリングが一通り注文すると、先ほどの質問を再び有森にぶつけた。

「誰を見ていたんだい？」

いきなりシェリングが声をかけてきたため、現に戻り、その質問に答える有森。

「ああ、あれは——」

同時刻。アメリカ国際数理研究所第三研究室にて——

一人の男が、暗い研究室の中で光る画面を見つめながらキーボードを打ち込んでいた。

男の名はラッセル・ハインライン。この数理論研究所の中でも一番の古株であり、次期所長候補でもある。年は70代といったところだろうか。そのラッセルが研究しているのが、数理論学的見地からの人工知能開発についてというもので、これを簡単に説明すると、論理学を数学で説明した学問——これを数理論理学という——から、人工知能を作ってしまうというものである。ラッセルはその第一人者でもあり、数学界の権威でもあるのだ。

「駄目ですよ。先生。こんな暗くしたら」

突如、暗い研究室が明るい蛍光灯の光で満たされた。ラッセルはスイッチの方を向くと、そこには一人の女性がいた。

「ラーシエル君か。悪いね、見回りご苦労様」

「いえ、これも仕事のうちですから。コーヒーでも淹れましょうか」
女性の名はメアリー・ラーシエル。この研究所の研究員である。

この研究所は研究員を交代交代に終業時刻が近づくと見回りさせる、という制度を採用してある。

「全く、古い制度だよ。文明の発達した今では、広角監視カメラですべての部屋をモニターできるのに」

「人の手で巡回することも必要ですわ。それよりハインライン教授、例の話ですけど……」

「分かっている。目標はこちらに向かって移動中だ」

ラッセルが小形端末の画面を見ながらそう答えると、メアリーは安堵する。そしてコーヒーカップをラッセルの机に置く。

「そろそろ来る。君はもう行き給え」

ラッセルがコーヒーを啜りりながら小形端末の画面を見ながら命令するような口調で告げる。するとメアリーは気を悪くしたのか、そくさと研究室から出て行ってしまった。

「漸くここまできたな。歴史の砂時計が逆さになるときが」

やがて歴史の革命者たる者の足音が研究室まで響いてきた。そして、その革命者が研究室の前に現れる。

「来たか。まあ座り給え」

「セバスチアーノ・モリノス？」

午後六時三十分。とあるレストランにて――

「ああ、一部では有名な殺し屋だ」

ワインで乾杯し、食事をしながら話は膨れ上がる。

「あのリアセル・クリファトスを殺したのもモリノスだと思っている」

「本当かい？」

ジェイムズが目を丸くして有森の顔を見つめる。

「だがあいつは今イギリスにいる筈なんだよ。だからおかしいんだ――」

午後六時三十五分。アメリカ数理解析研究所第三研究室にて――

「先ずはこの女を殺して欲しい」

ラッセルが革命者に向かって写真を渡すと、革命者は研究室から出て行った。

革命のときは近づいていた。全てを破壊し、創造するときは近づいていた。

潜在する可能性は引き出されるであらう。創造される世界は神が存在するだらう。

少なくとも、そのときは確実一步一步近づいているということだけは確実であった。

4（後書き）

第一章はこれで終了です。

次回の投稿日時は来週の日曜日の午後六時を予定しております。

月へ（前書き）

ご無沙汰しています。いかりんです。

最近、字数が少ない投稿が続いています。次週からはもっと多くいたしますのでご容赦をお願いいたします。

ところで文化祭シーズンですが皆様はこういう青春の一大イベントを堪能していらっしゃるでしょうか。

自分は……、お察しください。

そんなことは関係ないですけど、第五話、且つ第二章スタートです

月へ

——高度に発達した科学は魔法と区別が出来ない。

昔、高名なSF作家がそのような名言を残したことを暗転した部屋の中でミーシエルは思い出していた。

これを大昔の時代の人間が見たらどのような思うだろうか、確かに自分の祖父は今の時代を魔法の時代と比喻していた筈である。なるほど、確かに重力制御、月面着陸、火星人の発見——、確かに七十年程前には不可能といわれていたことが次々と可能になっている。月面都市の建設は世界中を驚かせ、火星人の発見は今も続く冷戦状態へ持ち込んだ。

暗転した部屋の中でそのようなことを考えていると、旧式のスピーカーから司令官の声が光が差し込まぬ部屋に鳴り響く。

「訓練はいつもやっているとおりに行い。君達の成績は常にトップクラスなので心配はいらないと思うが、細心の注意を払って行ってくれ。万一墜落でもしたら大変だからね」

そんなことは分かっている。ミーシエルは苦笑してそう呟くと、雑多のスイッチを全てオンにする。すると、暗転していた部屋が一気に明るくなり、丸い部屋一帯に——まるで空中に放り出されているような——外の景色が写る。目の前の機械は英文を表示しはじめ、発進の準備を整えていた。

「二〇.Q二号、発進！」

鳥の形をした小さな鉄の塊が天高く浮かび、空中をすべるように移動していった。

二時間後、訓練を終えたミーシエルが基地司令官に呼び出された。なにやらただならぬ雰囲気だったので、シャワーを浴びて直ぐ行く。

ミーシエルが勤務しているここアメリカ空軍第三基地では、戦闘

機の数は一五つある基地の中でも最多で、設備も整っている。アメリカによっている太平洋上に存在し、海軍の補給基地としても有名である。

ミールが基地司令官室前に来ると、指紋認証、声紋認証を終えて部屋の中に入る。

古めかしい資料が数多くある本棚に囲まれた部屋の中心に、机が存在していて、その机の上で資料を読んでいた基地司令官ロストロイ・ルイゼルがミールの方向を向いた。

「緊急の要件らしいですが、いかがなさいました？」

「先ずはこれを見てくれ」

机の上にはめ込まれた形で存在する液晶モニターをロストロイが指差すと、突如映像が流れ始めた。その映像には、巨大な戦艦が砲撃しあつてゐる映像だった。次に月面基地の映像が流され、多くの保護健康派が基地の中で籠城作戦を強いられているのが発覚した。

映像が止まると、ロストロイがミールの顔を見る。

「そして、君はこれから月に行つてもらう、米英日選抜隊が結成され、君はその隊員になつたわけだ」

「成る程。ところでいつ出発ですか？ 準備等があるのですが」

「三日後だ」

「ふむ、こちらで準備する必要があるものは？」

「基本的に支給品だけだ。君は体ひとつで行き給え」

「そうですか」

「では、健闘を祈る」

基地司令官室からミールが出ると、そのまま歩いて宿舎へ向かった。ミールは憤慨していた。何故早く知らせなかったのか。何故自分ひとりだけ選ばれたのか。

心の準備ができないまま三日が過ぎ、ミールを乗せた宇宙船は月面を目指して地球から脱出した。

ミールは船内を見回した。知り合いが一人二人いる程度で、知らない顔が多かつた。一人の友人が日本人と親しげに会話してい

る。ミーシエルはあの会話に混じりたいと考えるも、席が遠く、それは不可能だった。

やがて白く巨大な環が見えてきた。宇宙ステーションである。なかなか面白いつくりをしていて、環の穴に存在する軸を中心に回転している。回転しているので重力が生まれている。つまり、宇宙ステーションで過ごすには何も不便はないということだ。

その宇宙ステーションを抜けて、いよいよ月への本格飛行へ移行する。月ま6時間ほどで到着する。因ってその間はほとんどの隊員が睡眠する。ミーシエルも例外ではない。きっとミーシエルが目を開けたら黄金色に輝く月面が見えていることだろう。

月へ（後書き）

次回の投稿は来週の日曜日になります。

惨劇（前書き）

ご無沙汰しています、いかりんです。

まずはじめに謝罪させていただきます。申し訳ございませんでした。期限に遅れて登校するなど言語道断。しかもそれを二回もやるとは人間失格です。読者の皆様には大変ご迷惑をおかけいたしました。本当に申し訳ございませんでした。

お知らせ1：ツイッター始めました。執筆状況やお知らせをツイートいたしますので、ツイッターをやっていらつしやる読者様がいらつしやいましたら、ぜひフォローしてください。

お知らせ2：短編を今月中にアップします。おそらくSFです。よろしく願います。

前書きが長くなりました。怒涛の第六話、スタートです。

惨劇

電子的な合成音声が宇宙船内に響き渡った。月に到着したことを知らせていたのだ。ミーシエルが重い瞼を開け、窓の下を覗き込む。ミーシエルの目には金色に光る山々と、その谷間にある灰色の月面基地が映っていた。ミーシエルはその神秘的な光景にしばらく見とれていたが、月面に宇宙船が着陸した衝撃により正気に戻り、すばやく立ち上がった。

宇宙船のハッチが開くと、特殊部隊の隊員が月の重力下における特異な歩き方（跳ねるようにして歩いていく）で、月面基地内に入る。

ミーシエルは安堵した。月面基地内はGCD（重力走査装置）が利いているのだ。これによりあの歩き方ではなく、地球上における、いわば人類共通の”普通”に歩くという行動ができるようになる。

2053年に実現されたこのGCDは、重力場の動きを操作し、重力を操ろうというもの。つまり、実際の重力場が描く時空のゆがみをキャンセルできたり、調節することが出来る代物なのだ。そう、これこそ重力を操作するということである。だがこの装置ひとつ購入するのに数億円はかかるため、月面基地や火星基地以外ではあまり見られない装置でもある。

しかし、そのGCDが存在し、自分自身が普段と同じように動けるからといっても、ミーシエルは気を引き締めていた。自分たちが地球のように生活できる、ということは、相手も対等な条件だということである。一瞬でも気を緩めればそれは死につながるからだ。ミーシエルは大きく息を吸って吐いた。他の隊員たちが走り始めると同時に、自分も走り始める。

足音に気づいたのか、侵略過激派の兵たちも、ミーシエルら特殊部隊に向かって走り始めた。特殊部隊はさらに力を出して駆け抜ける。前方で銃声が聞こえ、ミーシエルも止まって、ライフルを取り

出し、戦闘に備える。が、前方ですべて処理されたようで、侵略過激派の兵士たちの叫び声を皮切りに、再び部隊は走り始めた。

ミーシエルはライフルを持ちながら、月面基地を駆け抜ける。これを使うことないと確信しつつ、楽な仕事だと思っていた。

だが、その一瞬の気の緩みが、惨劇を巻き起こした

青年は、部屋でテレビを見ていた。その報道に目が離せなかった。『えー、たった今入った情報によりますと、月面基地に侵入した特殊部隊は侵略過激派と依然として交戦を続けているようです。正確な情報はわかりませんが、アメリカが発表している情報だと、死亡した隊員は14名だということです。非常に心配なニュースですね。では次のニュースです。アメリカ数理解析研究所でおこった女性の殺人事件と、ドイツのクリファトス氏の殺人事件ですが、アメリカ当局が……』

青年、ジェイムズ・クラークはコーヒーを飲みながらこのニュースの衝撃を味わっていた。今回の作戦は穩便に済ませるはずだ、と同僚であり親友のクロウス・フリージウスに聞かされた。ならなぜこのような戦闘が起きているのか。クロウスに聞いてみようと思った。

コーヒーをすすり、パンもすべて食べ終わると、いすから立ち上がって身だしなみを整え始めた。そして十五分後、ジェイムズは家を出た。

最近ジェイムズは熱心に研究していることがあった。クロウスの抱えている研究で生じたプログラムの誤作動を直したときに、あるヒントを得た。そのヒントを基にして数理ソフトを開発している。これが開発できれば、自分も世界一有名で数理工学研究施設の権威的存在でもある、イギリス王立数理科学研究所へ入れるはずである、と確信していた。さらに、そのソフトがもう少して完成しそうなのである。自分が数理工学の権威になる日も近いと確信していた。そしてその確信は彼自身の自信につながる。

もし世界的なイギリス王立数理科学研究所に入ったらどうなるだろう。あそこは設備もよいし、さらにこの手に関する研究が出来るだろう。

そんなことを考えているうちに、研究所についた。そのまま彼のデスクに向かい、ソフトの開発を始めた。普段、周りからは無気力で怠け癖がある研究員としか思われていなかったで、彼が熱心に研究している姿を見た研究員は顔をしかめ、首をひねった。だが、彼はそんなことなどどうでもよかった。彼にとって、もうおさらばすると同然なこの研究所の研究員に別段感情はわかなかった。次元突破システムにも彼はあまり関心がなく、ここも親友であるクロウスと一緒に入ると決めた研究所なだけであり、そのクロウスからも「お前は才能があり、どこへでもいける」といわれていた。これはつまり、「お前がここを離れても、俺は何も思わない。お前の成功を祈っている」という意味と同義である。

ジェイムズがキーボードの上で手を躍らせていると、クロウスがゆっくりと近づいてきた。気配に気づいたジェイムズは、クロウスを見やる。

「ずいぶん熱心にやってるじゃないか。そんなに楽しいか？」
クロウスがコーヒーをすすると、ジェイムズがゆっくりと口を開く。

「それよりもだな、今朝の月面基地での戦闘に関するニュースを見たか？」

「もちろんだ。基本的にニュースは毎朝チェックしている」
ジェイムズがコーヒーを飲む。続けて再びジェイムズが口をあける。

「どう思う？俺はスパイがいると思うんだけど」
「俺もそう思う。おそらくアメリカ、イギリスはもとより、世界各国に保護穏健派のフリをした侵略過激派のやつらがいるだろうな。ここだけの話、特殊部隊にもスパイはいておかしくないとさえ思っている。そして、特殊部隊の選抜を行ったのはアメリカ政府、イギ

リス政府、日本政府だ。この巨大な国の中でもかなりの権力がある人物だと考えていいぜ。特殊部隊の選抜にも影響を与えるほどの大物って言われ、一瞬思いつく政治家が10人ほど思い浮かぶも、それはありえないとその考えを捨てるだろう。そしておそらくあいつらはそれが狙いだ」

「怖い話だ。この研究所にスパイがいてもおかしくないな……」

「そりやそうだろう。ここは次元突破システムを研究している研究所の中でもかなり大きい研究所だからな」

クロウスが口を閉じると、一瞬の沈黙が訪れた。誰かと小型情報端末で話していた女性研究員があわてたそぶりで走っていたときに起こった足音を除けば、研究所は静寂に包まれた。だがそれも一瞬のことで、すぐにキーボードをたたく音がなり始める。

クロウスがコーヒーをすすると、ジェイムズのパソコンのモニターを覗き込んだ。

「進んでいるのか？その研究」

「おかげさまでな。後もう少しで発表出来るレベルまでにはこぎつけたよ」

「そいつは何より。お前はもっと大きい研究所にいけるからな、まあせいぜいがんばってくれよ」

クロウスが手を振りながら自分のデスクへ帰っていくのを見届けると、ジェイムズも自分の研究に情熱を注ぎ始めた。

——誰か救助を頼む！一人死にそうだ！

乾いた叫びが戦場に響いた。ミーシエルは自分の愚かさを悔やみ、自分を心のうちで罵倒し叱責した。一瞬の気のゆるみが命取りになると肝に銘じていたのにこの失敗は、もはや人間失格といっても良いとさえ感じていたのだ。

死者はすでに17名に達し、敵からの攻撃を防ぐことで精一杯だった。軍医も怪我を負い、負傷していない人間はいないといってもいい。すべては敵の策略だったのだ。思えばすべてがうまく出来す

ぎていた。が、この敵を倒さねば、およそ100名の命は救えない。責任を感じながら、敵からの攻撃を防ぐ。

きわめて苦しい状況であった。ミーシエルは部隊長に新型の爆弾を使うことを提案し、部隊長もそれをしぶしぶ了承した。ケースから新爆弾をミーシエルが取り出す。そしてそれを敵に投げつけた。

結果として敵兵は全滅した。この新爆弾は、これだけで手榴弾の十倍ほどの威力を持っている強力な爆弾であり、そのほとんどが謎に包まれている怪しい爆弾である。が、今はなりふりかまっている場合ではないということは生真面目な部隊長も把握していた。今は基地に取り残されている人々の命を救うことが最優先なのである。

再び特殊部隊が走り始めた。どうやら先ほどの敵兵が基地内にいたすべてらしく、基地内に取り残されていた人々がいる部屋——巨大な会議室である——までたどり着けた。アメリカ軍の兵士であること、救助に来たことなどを説明する。そしてその人々を連れ出して宇宙船までむかう。部隊長の連絡によると、どうやら護衛艦が先ほどここへ到着したらしい。

そして、走り続けて十分ほど経つと、いよいよ基地からも脱出し、特殊部隊と救助された人々が宇宙船に乗り込んだ。宇宙船は再び大きな衝撃を放ちながら、護衛艦とともにつきあら地球へ向かうのだった。

惨劇（後書き）

次回は11/13の投稿になります。

暗闇より（前書き）

ご無沙汰しています。いかりんです。

最近寒いですね、寒いです。イヤ本当に寒い。寒すぎて困る。

地球の空調設備が少し故障したらしいです。すぐに地球さんはエアコンを修理に出していただきたいところ。

もうね、寒いって言う話題以外に手持ちの話題がないぐらいに寒いんですよ。

そんなことはどうでもいいですね、いつものように前書きが長くなりました。

というわけで衝撃の第七話スタートです。

暗闇より

秋。

ジェイムズ・クラークは学会へ提出する論文を意気揚々に書いていた。彼が今まで熱心に研究していたソフトがついに完成したのだ。彼は特別に研究所を休み、朝から論文の執筆に没頭していた。ジェイムズは、これからの生活を考えていた。この論文は大変画期的なもので、これが認められたら、王立数理科学研究所への配属はほぼ決定したようなものである。

そして、ジェイムズはもう間もなくその論文を書き終えるところなのである。

秋。

ジェイムズは記者会見を行っていた。この画期的な論文は発表したとほぼ同時に世界中に認められ、学会での発表も大成功に終わった。今はマスコミ向けに自身の論文を解説しているところである。

秋。

記者会見も終わり、ジェイムズは車に乗って自宅へ向かっていた。車を運転しながら、鼻歌を歌っている。不意に自身が運転している車を追っている黒塗りの車に気づいた。するとジェイムズは、左にハンドルを切る。だが、その先にもう一台、黒塗りの車があった。そう、気づけばジェイムズは囲まれていたのだ。

直後にすべての黒塗りの車がとまる。衝突を避けるためにはジェイムズも止まるしかない。だが、止まってしまつと、この黒い集団に囲まれたままになってしまう。

だが、ここはとまるしかない。覚悟したジェイムズは車を止める。すると、黒塗りの車の中から、男たちが数人現れると、ジェイムズの車の窓ガラスを割り始めた。

堅固なガラスを最新機器で、まるでケーキを切り刻むかのようにガラスを切ると、社内には手を伸ばし、運転席にいたジェイムズをつかんだ。そのままジェイムズを車から引きずり出す。

そしてジェイムズに、睡眠薬を溶かしてある、ペットボトルに入った水を飲ませる。たちまちジェイムズは崩れ落ち、そのまま黒塗りの車に乗せられた。

そして黒塗りの車は走り去っていった。

秋。

『早朝からお伝えしているように、数学者であり技術者であるジェイムズ・クラーク氏が何者かに誘拐されました。地元当局は継続して捜査を続けておりますが、何一つ証拠をつかめていません』
クロウス・フリージウスは驚愕していた。つい先日まで笑顔で会話していた相手が、誘拐されたのだから、無理もあるまい。

だが、今はそれよりも大事なことがあるのも事実であった。時間遡行計画が大詰めに入ってきたのだ。漸く時間遡行のメカニズムが解明されそうなのである。

クロウスはすでに身支度を終えており、脇にあったかばんを抱えて、家を出た。そのまま二輪車（注：空を飛ばないタイプ）で研究所まで走っていく。

友人であるジェイムズがどんな目に合っているかも知らず。

秋。

ジェイムズは監獄の中にいた。電流を流されたり、旧時代の拷問道具などで傷めつけられたが、彼の意思は固かった。そう、自身の研究、そして時間遡行計画のことは絶対に口を割るまいとしていたのだ。マスコミ用の説明はあくまで簡易的なもので完全ではない、そのことに気づいた侵略過激派の工作員がジェイムズ自身に研究を説明させ、さらに侵略過激派の研究員にさせるつもりなのだ。ジェイムズはそれには屈しなかった。だが、そろそろジェイムズの肉体

と精神は限界に近づいていた。彼は手紙を書こうと決意するのであった。

「手紙を書きたい、ペンと紙をくれ」

「あああ？　だめに決まっているだろう」

「頼む、手紙を書かせてくれたら俺は侵略過激派の研究員になるから、頼む」

「チツ、仕方ねえ。ちつと待ってろ」

やがて男が紙とペンを持ってくると、手紙を書き始める。やがて書き終えると、男がそれをもって郵便局に向かった。

「こんな前時代的なコミュニケーション方法のどこがいいんだかね、まったく」

やがて男が帰ってくると、監獄を覗いた。

そこにはジェイムズの惨憺たる姿が在った。彼は、ペンで自分の目を突刺した後に、のど元にペンを突き刺したまま死亡したのだ。

最後まで誇りを持って死んでいたジェイムズを、誰が罵倒できようか——侵略過激派を除いては。

秋。

クロウスは家の前で呆然と立っていた。手元の紙を眺めながら。

『僕のこととはかまわずに、君は走り続けてほしい。自分の目的に向かって』

手紙にはそう書いてあった。

暗闇より（後書き）

次回の投稿は（できれば）来週の日曜日になります。延期する場合は来週の水曜日になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0723x/>

神様はいない

2011年11月17日03時26分発行